



「遺す」という仕事について

過去20回にわたって駄文を書き連ねてきた「MAPPS Story」も、これが最終回です。今回は、「博物館の存在意義」について、私なりに日ごろ思うことを書いてみました。業者ごときが僭越極まりないのですが、最後ということで、どうかご容赦を。

打ち合わせの後、展示を見学した館で、江戸時代の「犯科帳」が目にとまりました。今で言う裁判記録のようなものでしょう、そこには罪状と刑罰が記載されています。

密輸で磔に処せられるなど、現代と比べてはるかに刑罰が重かったのです。もし冤罪だったら悲惨な話ではありますが、江戸末期に来日した欧米人の「庶民が幸せそうだ」という感想がさまざまな文献として残っていると云いますから、厳しい刑罰も一方で社会の安定に一役買っていたのかもしれない。

今の社会の仕組みは歴史の積み重ねの上に出来上がったものです。「資料を保存する」ということは、後世の人が先人の労苦や叡智を紐解けるようにしておくという意味で、改めて大切な仕事だと思いました。

その情報は「正当」なのか

デジタルアーカイブは、資料を保存する上で効果的な手段のひとつです。収蔵品管理システムはそれを進める道具、つまり後世の人が紐解ける環境をつくるためのもの。手間がかかる情報の保全・蓄積という作業を補助するツールです。

一般利用者から見れば、学芸員が知恵を使って紡いだ情報をしっかり保管しておいてくれるもの、ということになります。

デジタルの世の中になって、情報の管理も発信も大変楽になりました。今や誰もがブログやSNSなどで自分の足跡を残しています。また、個人の研究成果も大量にネットに溢れていて、検索すればどんなことでもずらっと出てきます。

ただ、インターネットで調べ物をする際にいつも思うのですが、本当に正しい情報と、良かれと思って書いたけれどあくまで個人的見解に留まる情報が混在していて、それを峻別する

には意外と手間がかかります。仕事で正式な資料を作る時には、得た情報の真偽を確かめるプロセスも必須なので、かえってロスが発生していることもあるのかもしれない。

学芸員の汗ほど信用できるものはないのです

学芸員が展示のキャプションや図録の解説を書く時、その情報に対する責任が伴います。「たった3行の解説に数日を要した」という話もよく耳にします。

専門知識を持つ方が苦勞して裏付けを確認し、その時点では「まず間違いなし」と考えられる情報を出す。つまり、博物館が公開している収蔵品データベースは、その分「正当性」という価値を纏っているということができます。

「責任は負わないけれど説明してあげるね」的な情報がインターネットに溢れている現代だけに、博物館が発信する情報価値は、ひときわ大きな重要性を持つと思うのです。



当社が推進している「MAPPS」の中核をなす収蔵品管理システムのプラットフォーム提供事業の目的も、ここにあります。監修された情報群を広く世間に提供し、しかも後世の人々が紐解ける形にして100年先にも朽ちないように。学芸員の皆様の仕事は、継承されるべき正当性があるのですから、より保護しやすい環境が必要であるはずなのです。

後世の人々にとって、それは「今ある社会の形が決まった経緯」を知る最高の羅針盤になるはず。僭越ではありますが、弊社はこの「遺すもの」づくりをお手伝いしたい。そして、これこそが、全21回にわたる「MAPPS ストーリー」全編を通して考えてみたかったことなのです。